

東京都の防災対策に対する東京都議会議員の態度の決定要因

2019年2月5日

一、はじめに

近年、平成30年7月豪雨などといった激しい雨や落雷、台風による災害が全国各地で多発している。全国の各自治体は、こうした災害による被害を防ぐまたは最小限にとどめるために防災対策を行っている。防災対策には、河川や下水道の整備といったハード面と、洪水情報の提供や浸水予想区域図、洪水ハザードマップの作成といったソフト面の2つの側面がある。はたして、議員は現行の防災対策は十分なものであると考えているのだろうか。そこで、東京都に焦点を絞り、東京都議会議員は東京都が行っている防災対策についてどのような考えを抱いているのだろうか、ということに着目することにした。

本研究では、東京都が行っている防災対策に対する東京都議会議員の態度は、河川や下水道の整備といったハード面と、洪水情報の提供や浸水予想区域図、洪水ハザードマップの作成といったソフト面で違いがあるのか、そして、その態度にはどのような決定要因があるのか、というようなことを分析していきたい。

二、先行研究

以下で挙げているのは、所属政党、イデオロギー、年齢、当選選挙区、地元志向であるかどうか、関心政策分野にどのような影響を与えているかについて述べられた先行研究である。

第一に、議員の態度の決定要因として当選回数や所属会派が考えられる。李(2016)によると、「議員の関心政策分野は、当選回数に応じて差がある。」という仮説の検証過程などを通じて、自民党と民主党の両方で当選回数が議員の政策決定において影響を与える主な要因ではなく、むしろ当選回数より所属政党が議員の傾向を説明するために、より便利である。自民党の場合には議員が経済と外交政策への関心が高く、自分の意見が形成されており、議員たち全体の意見が反映される政策が決定されたり、それと近い政党リーダーが選ばれる可能性が高いことに対して、民主党の場合には議員の経済と外交政策への関心自体が低く、政党リーダーの理念性向がそのまま民主党を代表することになる可能性が高いようだ。

第二に、決定要因としてイデオロギーや年齢が考えられる。白崎(2015)によると、小泉政権期における有権者の保革自己イメージで、中年に関して「保守派は自民党支持、革新派は民主党支持」との仮説通りの結果を得たが、老年では民主党のイデオロギー位置を捉えかねる姿を、若年では民主党を保守派が支持する「ねじれ」が存在した。争点態度については、自己イメージと安定的に結びつくのは経済争点ではなく防衛争点であり、中年・老年では防衛争点への態度が定義上の自己イメージ通りなのに対し、若年では両者がしばしば矛盾する。また、特定の争点に関して対立する2つの政策意見のいずれかを支持するか否かはイデオロギーの1つの表出に過ぎず、争点自体の重要性認識や政治信頼などの従来のイデオロギー研究では重視されない意識にもイデオロギーは関わる。

第三に、決定要因として当選選挙区や地元志向であるかどうかと考えられる。品田(2001)によると、1990年代に行われた3回の総選挙で各候補者が提出した

選挙公報をもとに選挙公約のデータを作成したところ、この分析から得られた知見として、「地域向け」公約は保守系候補者に多いこと、90年代の3回の総選挙で最も「地域向け」公約が多かったのは90年で、93年や96年には減少したこと、地域向けになされる公約は、運輸・建設・地域振興関連が多く、通産・文教・農水が準じること、地元利益指向の公約は選挙に強く特に93年以降は圧倒的に強いこと、地元利益指向の公約をする保守系政治家の中には運輸・建設系と地域振興系の分化が見られること、地元利益指向の公約言及量と得票率の間には当該回についても前回分についても正の相関が見られたこと、地元利益指向の公約言及量と当選回数との関係については中堅以上のベテラン議員に言及が多いことが挙げられた。

このように、議員の政策態度の傾向を説明できるものとして、所属政党、イデオロギー、当選選挙区などが考えられる。

三、仮説

「東京都が行っている防災対策に対する東京都議会議員の態度は、その東京都議会議員の会派、イデオロギー、当選した選挙区が決定要因となる。」という仮説を立てる。会派が決定要因の一つであるのは、李(2016)の「所属政党が議員の傾向を説明するために、より便利である」という結論による。例えば、もし議員の所属会派が小池百合子都知事が設立した都民ファーストの会であれば、都の防災対策に対して賛成的な態度を示す傾向があるだろう。次に、保革自己イメージが政策選好に与える影響という点で、白崎(2015)の結論をもとにすると、イデオロギーが決定要因の一つならば、「保守的であるほど、新たな視点からの防災対策は望まない」といえるのではないか。また、当選した選挙区を決定要因の一つであるのは、品田(2001)の「地元利益指向の公約は選挙に強い」という結論による。例えば、その選挙区が地域の特性上なんらかの災害を危惧している人々が多いなどで、候補者はその地域の防災に関する公約を掲げて選挙に当選し議員になるので、当選した選挙区が災害に関して身近であるような土地柄であれば、議員は防災対策を不十分だと見なす傾向があるだろう。

四、分析について

本研究のために、「津田塾大学中條研究室 2018年度 東京都議会議員調査」のデータを用いる。この調査は、グーグルフォームで調査票を作成して回答してもらいオンライン調査を用い、東京都議会議員 126名を対象に、2018年10月17日から11月27日の42日間にわたって行われ、有効回答46名(回収率36.5%)であった。この調査のデータより、本研究で分析する変数は以下の表1の通りである。

変数	調査票の対応する設問	どのような尺度か
『Q13-a (ハード面)』	「Q13 a) 近年、平成30年7月豪雨などといった激しい雨や落雷、台風による災害が全国各地で多発しています。東京都は水害に対して、河川や下水道の整備といった防災対策を行ってきました。東京都の防災対策について、あなたはどちらの考えに近いですか。」	1: 不十分である 2: どちらかと言えば不十分である 3: どちらとも言えない 4: どちらかと言えば十分である 5: 十分である
『Q13-b (ソフト面)』	「Q13 b) それでは、洪水情報の提供や浸水予想区域図、洪水ハザードマップの作成といったソフト面ではどうでしょうか。」	1: 不十分である 2: どちらかと言えば不十分である 3: どちらとも言えない 4: どちらかと言えば十分である 5: 十分である
『都知事評価』	「Q1 現在の東京都知事の仕事ぶりについて、「とてもよくやっている」を10点、「まったくやっていない」を0点とすると、あなたの評価は何点でしょうか。」	0(全くやっていない)~10(とてもよくやっている)の11段階
『イデオロギー』	「Q2 異なる政治的立場を表すとき、「保守」と「リベラル」、あるいは「右派」と「左派」などと表現することがあります。もっとも右派・保守的な立場を10、もっとも左派・リベラルな立場を0とすると、あなたの政治的立場は、いくつになりますか。0から10の数字でお答えください。」	0(左派・リベラル)~10(右派・保守)の11段階
『年齢』		0: 女性、1: 男性
『性別』		現在居住する地域に合計で何年住んでいるか
『居住年数』		

表1 変数の一覧表

以下の表2は、東京都が行っている防災対策に対する東京都議会議員の態度を、河川や下水道の整備といったハード面と、洪水情報の提供や浸水予想区域図、洪水ハザードマップの作成といったソフト面で分けて度数分布表にしたものである。ハード面、ソフト面の態度ともに最も度数が高いのは「どちらかといえば不十分である」であるが、多くの議員が東京都の防災対策が十分であるとは考えていないことがわかる。また、「どちらかといえば十分である」の度数を比較したとき、ソフト面の方がハード面よりも十分と考える議員が多いこともわかる。

階級(ハード面の態度)	階級番号/階級値	度数	相対度数	累積相対度数
不十分である	1	6	0.13	0.13
どちらかといえば不十分である	2	22	0.48	0.61
どちらとも言えない	3	10	0.22	0.83
どちらかと言えば十分である	4	8	0.17	1.00
十分である	5	0	0.00	1.00

階級(ソフト面の態度)	階級番号/階級値	度数	相対度数	累積相対度数
不十分である	1	2	0.04	0.04
どちらかといえば不十分である	2	20	0.43	0.48
どちらとも言えない	3	12	0.26	0.74
どちらかと言えば十分である	4	11	0.24	0.98
十分である	5	1	0.02	1.00

表2 度数分布表

以下の図1, 2は、東京都が行っているハード面とソフト面の防災対策のそれぞれに対する東京都議会議員の態度についてのヒストグラムである。ハード面とソフト面のヒストグラムを比較すると、やはり「どちらかといえば不十分である」と考える議員が最も多く、ソフト面の方がハード面よりも十分と考える議員が多いことがわかる。

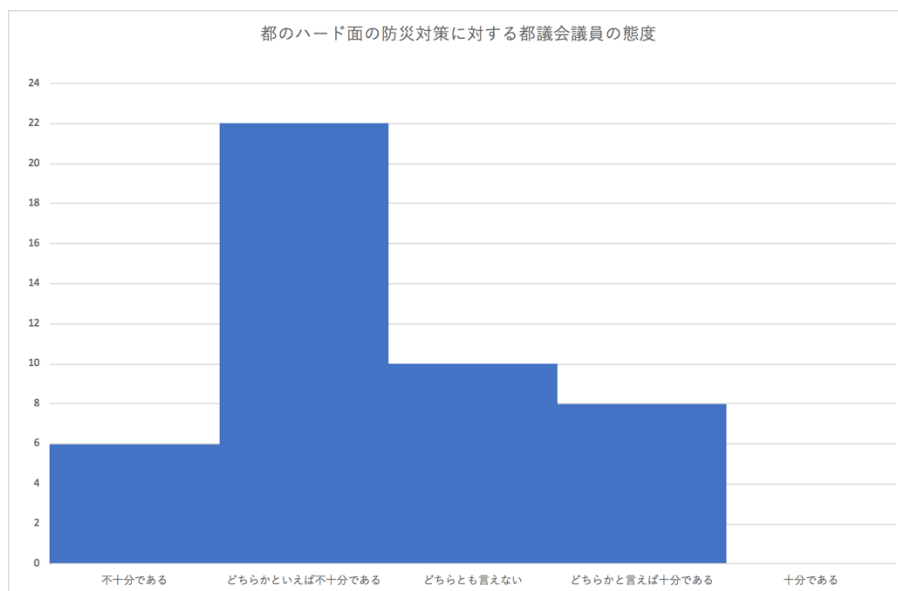


図1 ハード面のヒストグラム

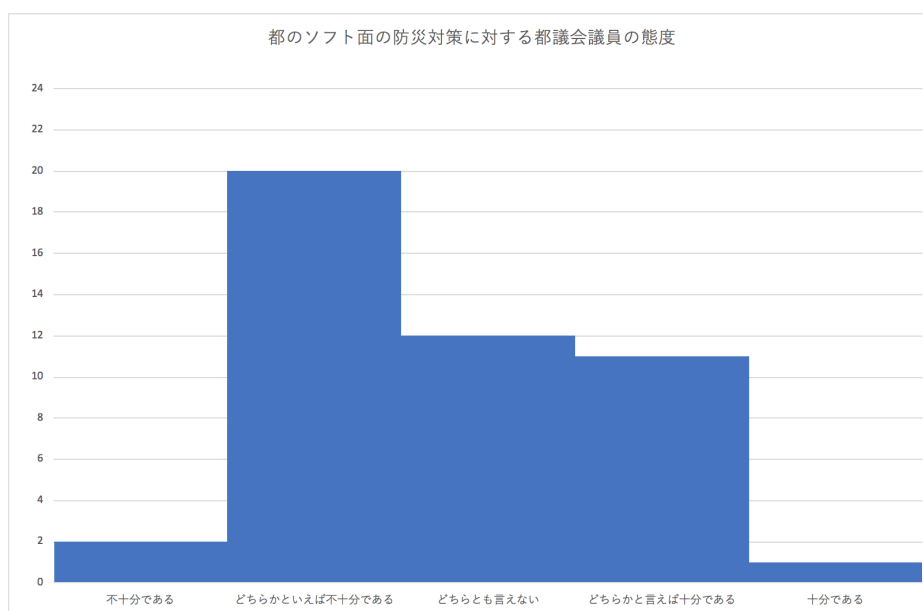


図2 ソフト面のヒストグラム

以下の図3は、主要な x1 である都知事評価についてのヒストグラムである。全体的に議員の都知事に対する評価は高いということがわかる。

都知事評価のヒストグラム

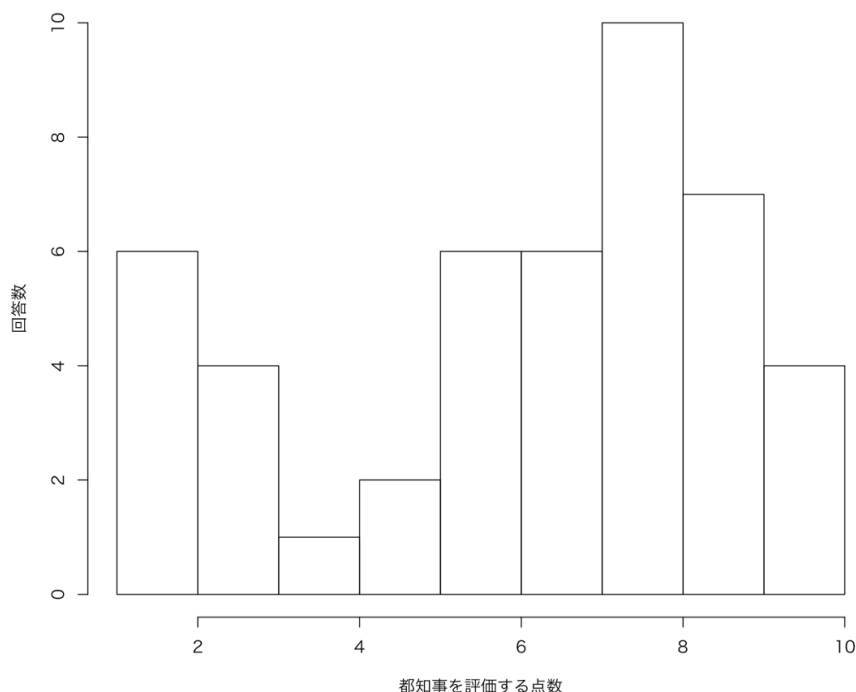


図3 都知事評価のヒストグラム

以下の表3は図1の各変数の平均値、分散、最小値、最大値、中央値、合計(n)についての一覧表である。前述の図3の通り、平均が6.48で中央値が7であるように、議員の都知事に対する評価は高いということがわかる。イデオロギーは、平均が4.48で中央値が5なので、保守的カリベラルのどちらかへの偏りは見られない。年齢平均は49.13才である。居住年数は平均値が26.48年だが、最も少なくても1年で、最長で57年とばらつきが大きい。

変数	平均値	分散	最小値	最大値	中央値	n
Q13-a (ハード面)	2.435	0.873	1	4	2	46
Q13-b (ソフト面)	2.761	0.897	1	5	3	46
イデオロギー	4.48	6.21	0	9	5	46
都知事評価	6.48	6.88	1	10	7	46
年齢	49.13	106.69	29	68	49.5	46
居住年数	26.48	306.91	1	57	25.5	44

表3 記述統計量の表

五、分析結果

ハード面とソフト面の結果に有意な違いがあるかを判断するために、対応のある t 検定をしたところ、t 値は-2.185、自由度 45、p 値は 0.034 だった。p 値が有意水準 5%を満たしているため、ハード面とソフト面の結果に有意な違いはあると言える。

以下の図 4 は y(ハード面)と主要な x1(都知事評価)の散布図、図 5 は y(ソフト面)と主要な x1(都知事評価)の散布図である。

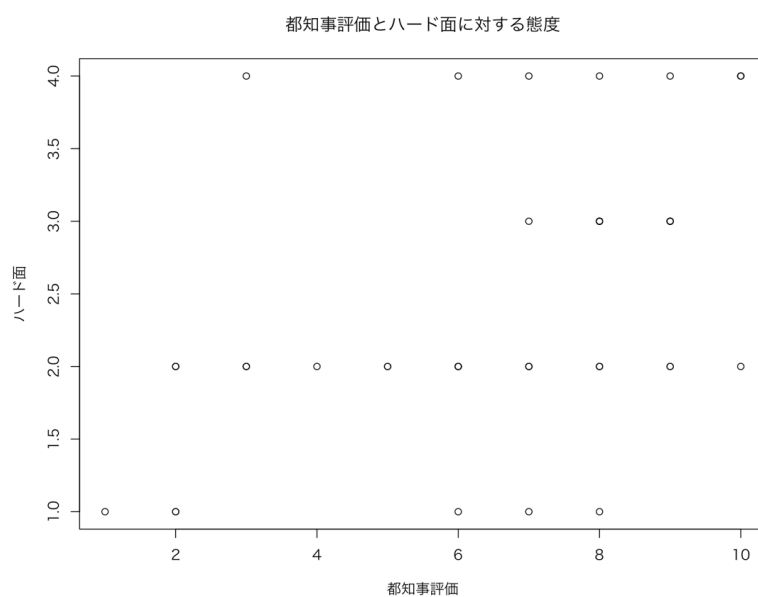


図 4 都知事評価とハード面の散布図

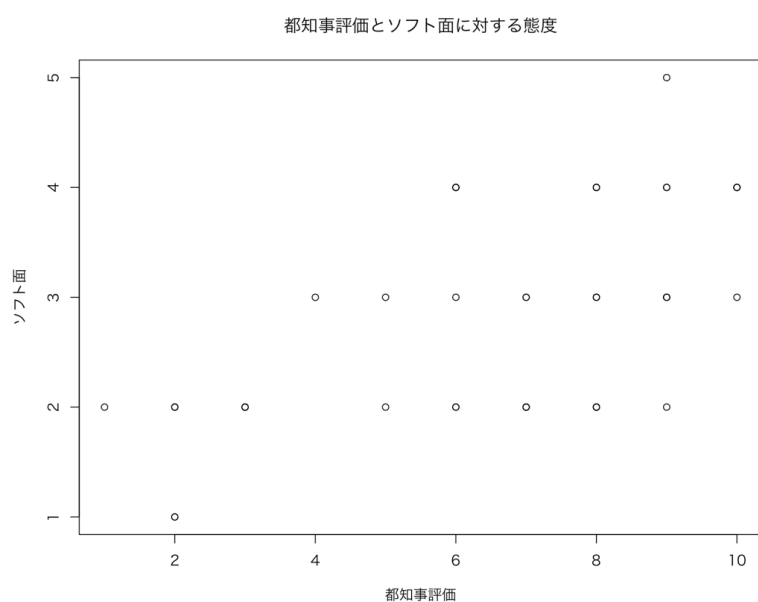


図 5 都知事評価とソフト面の散布図

以下の表4は、Q13-aとQ13-bを目的変数として、「都知事評価」「イデオロギー」「性別」「年齢」「居住年数」の中から説明変数を選択し、重回帰分析を行なった結果を表にまとめたものである（有意水準は10%であり、表ではp値を「*<10%、**<5%、***<1%」というように示している。）。ハード面とソフト面ともに、都知事評価が高いほど都の防災対策は十分であるとする議員が多いこと、そして年齢が若いほど都の防災対策は十分であるとする議員が多いことがわかる。また、ハード面に関して、イデオロギーが保守的であるほど都の防災対策は十分であるとする議員が多いといえる。ソフト面に関して、居住年数が長いほど都の防災対策は十分であるとする議員が多いこと、そして男性議員は女性議員に比べて都の防災対策は不十分であると考えているといえる。

	目的変数:Q13-a (ハード面)	目的変数:Q13-b (ソフト面)
都知事評価	0.12 **	0.25 ***
イデオロギー	0.1 *	
年齢	-0.03 **	-0.04 **
性別		-0.66 **
居住年数		0.02 *
切片	2.65 ***	2.95 ***
R-squared	0.35	0.40
n	46	46

表4 重回帰分析の表

六、結論

本研究では、「東京都が行っている防災対策に対する東京都議会議員の態度は、河川や下水道の整備といったハード面と、洪水情報の提供や浸水予想区域図、洪水ハザードマップの作成といったソフト面で違いがあるのか、そして、その態度にはどのような決定要因があるのか」という疑問に対して、「東京都が行っている防災対策に対する東京都議会議員の態度は、その東京都議会議員の会派、イデオロギー、当選した選挙区が決定要因となる。」という仮説を立てて、「津田塾大学中條研究室 2018年度 東京都議会議員調査」のデータをもとに分析を行った。この結果を踏まえて、『イデオロギー』は『ハード面』に決定要因の一つと言えることがわかった。また、『都知事評価』は『ハード面』と『ソフト面』の双方において重要な決定要因であることがわかった。

本研究を通して、我々は「首長への評価が高いほど、政策に対する好感度・満足度が高い」ということを学ぶことができる。このことから、首長は自らの施政への満足度を高めるためには、自らの好感度やパブリックイメージを上げる必要があるといえる。小池都知事についても、好感度やパブリックイメージを上げれば、都議会議員そして都民の都政に対する満足度を高められるのではないだろうか。

七、参考文献

李茶蓉「日本の衆議院議員の政策選好:多選キャリアを基準として」ソウル
大学国際大学院、2016年、1-52。

品田裕「地元利益指向の選挙公約」『選挙研究』16巻、2001年、39-54, 181。

白崎護「有権者の政策選好とイデオロギー」『静岡大学法政研究』20巻1号、
2015年8月、40-13。